

喜志遺跡

— 兼用住宅の建設に伴う発掘調査報告 (KS2017-1) —

2021.07.31 富田林市教育委員会

1.はじめに(図1・2)

喜志遺跡は、弥生時代から近世に至るまで人類活動の痕跡を残す複合遺跡であり、特に河岸段丘上に形成された弥生時代中期の集落跡として著名である。また、遺跡内で古墳は見つかっていないが、5世紀後半から6世紀にかけての埴輪が出土しており、埋没古墳の存在が想定されている。

今回の調査地は、弥生集落や埴輪出土地がある河岸段丘より一段低く、石川河岸から西に250m入った沖積段丘上に位置する。すぐ東側の沖積段丘崖下の低地には石川の水を引く西浦水路が北上し、歴史地理学的研究によるとこの付近に古市大溝の取水口があったのではないかと推測されている。沖積段丘上では1992年度に発掘調査(KS92)が行われており、弥生時代から中世にかけての遺物が出土している。沖積段丘崖下の低地は遺跡範囲外であり、試掘を含め調査は行われていない。



2.調査の方法と基本層序(図3)

基本層序は、I 盛土、II 耕作土、III 古墳時代～古代包含層、IV 暗褐色礫層(遺構面ベース土層)、V 沖積層(地山)である。

2017年11月8日に実施した事前調査で、古墳時代等の遺物を含む黒褐色上層(III層)が確認された。本調査は2017年12月18日から2018年1月25日にかけて、建物予定地を対象に実施した。排土置き場確保のため反転調査とし、調査区を南北の2区に分けることとなった。また、包含層直下の暗褐色礫層(IV層)も包含層の可能性があったため、V層上面で下層遺構の有無を確認した。

3.遺構と遺物

調査区(図4) 調査区北半の1区では、浅く不規則な塊状の落込みと、井戸1基を検出した。南半の2区では遺構面上で遺物が散見されたが、遺構は確認で



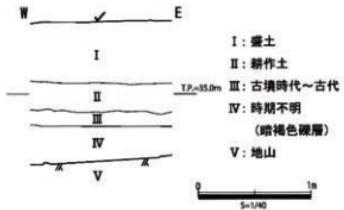


図3 基本層序

きなかった。遺構面上および落込み内から出土した遺物は、須恵器・土師器を中心に、弥生土器・サヌカイト剥片がわずかに混じる。1区北西端付近のみ比較的遺物の密度が濃い。また、1区・2区とともに下層遺構は確認されなかった。

井戸(図7・8) 井戸は1区の北西側壁付近で検出した。壁で北半分が切られていたことから、最低限の範囲で調査区の拡張を行った。井戸の上端は長径約1.2m×短径約0.9mの楕円形、底面は長径約0.65m×短径約0.55mの楕円形である。深さは約0.8mである。井戸枠は内面0.4m四方の方形で、北東角・南東角にL字状木材を配置し、板材などで不足箇所を補っている。各木材の上部は腐食が進んでいる。

遺物(図5) 井戸内で出土した土器は須恵器の年代から二時期に分かれ、井戸枠外は6世紀後半(1・2)から古代(7)、井戸枠内(3～6・8・9)は5世紀後半に属す。

井戸枠(図6) 合計で14材が出土した。うち2つのL字状木材の短辺内面・長辺内面にかけて当たり痕があることから、舟船の同一横断面両舷であると考え、発掘時に脱落した2材を中心配置したもののが図6に示す。当たり痕は幅2cmほどで連続する。当たり痕を舟船の水平方向とすると、部材の切断面から腐食部にかけて幅が狭まる。

左右両舷のL字状木材は内面角付近の当たり痕上有り貫通しない孔があり、脱落材にも同様の孔の痕跡が見られる。右舷の納穴は斜め方向に開けられており、左舷の納穴とは高さが異なる。右舷の上面に納穴の痕跡が見られ、左舷とほぼ同じ高さになる。

横断面の形状は凹形で、内底面は平坦、外底面も広

い平坦面をもつ。舷側の形状は、内底面が垂直に立ち上がる。外底面が、左舷が外底から上端に弧を描く一方で、右舷はほぼ垂直に立ち上がる。

木取りは、原木の中心より下方で上下両面を平行に切り出し、内面を削り抜き、外面を削りだしたものである。樹種同定は行っていないものの、針葉樹と推測される。

舟船を構成する4材以外は、長48cm・幅20cm・厚6cmの板材や、長25cm・幅10cm・厚1cmの径1cm円孔をもつ薄い板材などがあるが、元の用途は不明である。

4.まとめ

調査地一帯は東側の石川と西側の河岸段丘に挟まれた狭い冲積段丘面上であり、河岸段丘崖の開析谷から生じた自然流路によって分断されている。居住には適しておらず、今回調査で検出したような浅い井戸を掘り、耕作地として利用されてきたと考えられる。

井戸は5世紀後半から使用され、古代には完全に埋まつたと推測される。井戸枠は一部に舟船の木材を転用して構築されている。

井戸枠に転用された舟船の断面形状からは喫水の浅い平底であること、平面形状からは舟幅が狭まっており舳か艤よりの部位であることが推定される。当たり痕や貫通しない孔は、舟船の仕切り板に伴うもの可能性がある。また、両舷の納穴も舷側板との接合に用いられた可能性がある。

この舟船の使用時期は5世紀後半以前であり、古墳時代中期には石川を利用した水運が行われていた可能性を示す。また、大阪では古墳時代の舟船が全国的にも多く出土しているが、平底をもつ舟船の類例はない。

井戸枠・出土遺物については、大阪府教育委員会の宮崎泰史氏、岡田賢氏に実見していただき、貴重なご助言をいただいた。現地調査には河原秋桜、北本麻奈人、谷重祥也、土山賀代、吉末和希の参加を得た。舟船の実測は貴志正則、土器の実測は河原秋桜が行った。

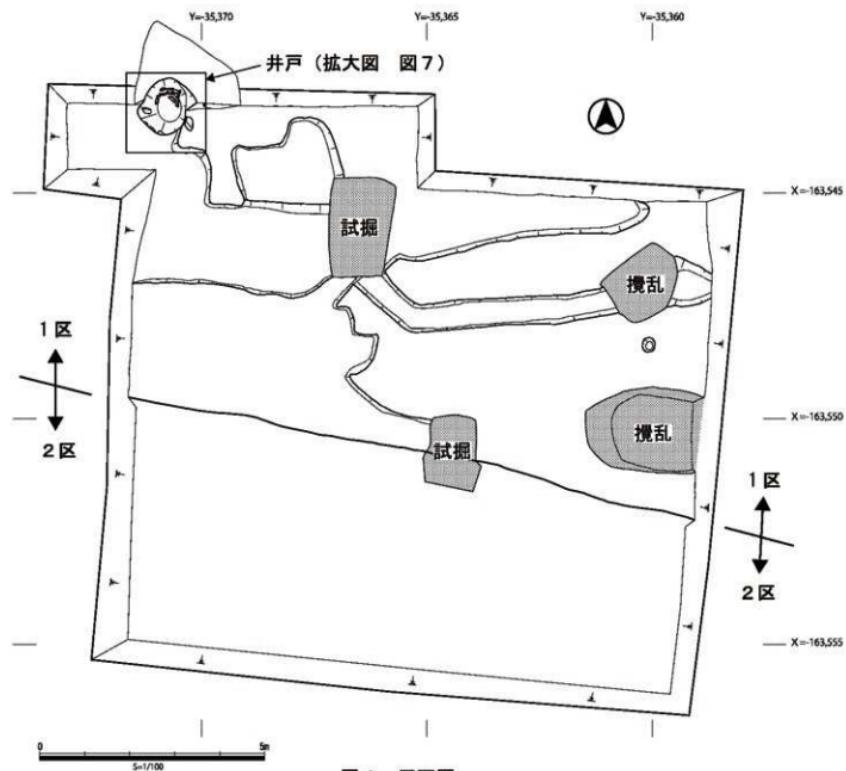


図4 平面図

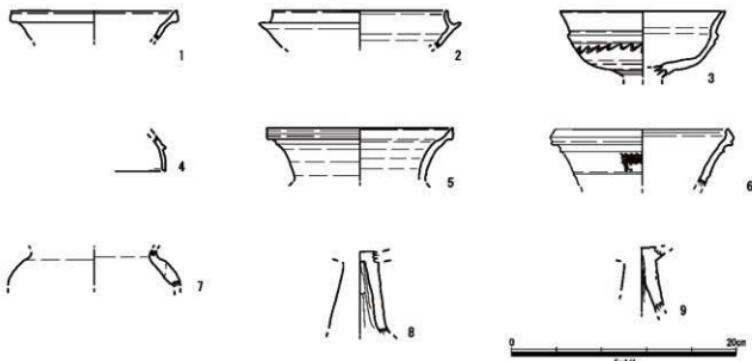


図5 井戸内出土遺物

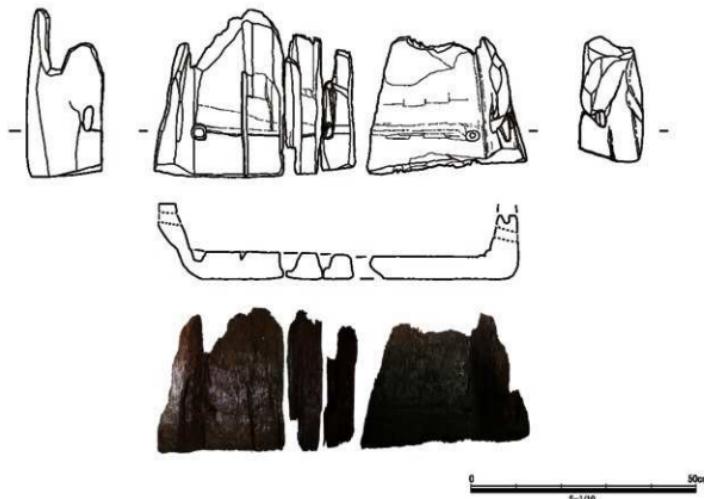


図6 井戸枠転用舟船材

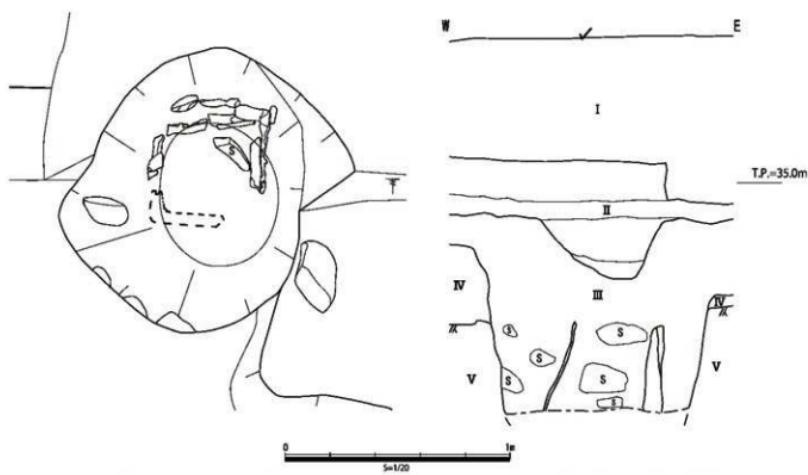


図7 井戸枠出土状況

図8 井戸断面（拡張前北側壁面）



写真1 1区完掘状況（南から）



写真2 1区下層遺構確認（南から）



写真3 2区完掘状況（西から）



写真4 2区下層遺構確認（西から）



写真5 井戸半裁（北側拡張前壁面、南から）



写真6 井戸拡北側張後井戸枠検出状況（南から）



写真7 井戸北側拡張後完掘状況（南から）

報告書抄録

ふりがな	きしいせき							
書名	喜志遺跡							
副書名	兼用住宅の建設に伴う発掘調査報告（KS2017-1）							
シリーズ名	富田林市文化財調査報告							
シリーズ番号	72							
収集者名	林 正樹							
収集機関	富田林市教育委員会							
所在地	〒584-0511 大阪府富田林市常盤町1番1号 TEL 0721-25-1000(代)							
発行年月日	2021（令和3年）年7月31日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東經	調査期間	発掘面積 (m ²)	発掘原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
きしいせき	とんじばしらしきしちょくうじゅう	27214	1	34°	135°	20171218 ～ 20180125	175	兼用住宅の建設 (記録保存調査)
喜志遺跡	富田林市喜志町一丁目			31° 30°	36° 53°			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
喜志遺跡	墓葬	古墳	井戸・窓込み	須恵器・土師器・井戸林	井戸林材と一緒に充填材を転用			

印刷 明朗社